抜粋版

近代輸出漆器のダイナミズム

―金子皓彦コレクションの世界―

ごあいさつ

開港場であり、海外と日本の文化が出会う町であった横浜。近代の横浜は、国内外の様々な文物が集う場であり、かつ新たなものが生まれる生産地でもありました。

当館では、これまで眞葛焼を始めとする陶磁器や、洋画家の五姓田義松をはじめ、明治期の横浜で生まれた様々な美術、工芸品の調査研究を進めてきました。

その調査の成果のひとつとして、日本を代表する工芸品として知られる漆器も、横浜と深い関わりがあることが明らかになって参りました。開港後、日本の工芸品は万国博覧会などで西洋から注目をあつめ、漆器もジャポニスムの流行する西洋からの需要に応え輸出が本格化しました。各産地では、小さな土産物から大きな家具にいたるまで、多種多様な漆器が制作される一方、貿易港である横浜は、各地から職人が集まって制作を行う漆器の生産地にもなっていきました。そして、輸出漆器の用途や意匠、和洋の文化と嗜好が融合して生まれたデザインは、独自の魅力をたたえているといえるでしょう。

本展覧会は、長年、海外に輸出された工芸品を蒐集してきた国内外有数のコレクターである、金子皓彦氏のコレクションを中心にご紹介します。これは金子氏が長年海外に輸出された様々な日本の工芸品を蒐集した、充実したコレクションです。本展ではそのなかから、特に芝山細工を使った漆器や、静岡・会津などの産地で制作され、横浜を通じて海外へ渡った輸出漆器、さらに同時代に漆器とともに輸出されることもあった、寄木細工や木象嵌などの輸出向けの木工芸もご覧いただきたいと思います。本展を通じて、漆器のイメージを覆すような近代輸出漆器の全貌に触れ、そのダイナミックな魅力を体感していただければ幸いです。

最後になりましたが、本展の開催にあたり格別なご協力を賜りました金子皓彦氏をはじめ、ご所蔵作品を快くご出品賜りましたご所蔵者のみなさま、また開催にあたり、多大なるご協力ご助言を賜りました関係各位に心より御礼申し上げます。

令和６年４月

神奈川県立歴史博物館
館長　望月　一樹

目次

ごあいさつ …3

【総論】
もうひとつの漆工史 ―近代輸出漆器のダイナミズム　角田 拓朗 ……6

〈図版篇〉
プロローグ 競演する技法 ―― 17

コラム01 近代の輸出工芸 …28 ／コラム02 漆器の輸出 中近世から近代へ …32

第一章 貝の光 骨の艶 ――芝山細工 ―― 33

コラム03 横浜写真アルバム …36 ／コラム04 横浜―輸出漆器の産地化 …42
コラム05「芝山」の歴史と技法 …46 ／コラム06 横浜と洋家具 …51
コラム07 修復 …80 ／関連地図 …84 ／コラム08 神奈川の漆器生産と横浜港からの輸出 …86

第二章 木の彩り ――寄木細工・木象嵌 ―― 87

コラム09 寄木細工 …92 ／コラム10 飾棚 …100 ／コラム11 販売 …107
コラム12 木象嵌 …130 ／コラム13 調査研究から図録撮影へ …138

第三章　漆のにぎわい　――輸出漆器 …… **139**

コラム14　産地　…149　／コラム15　親和的な素材―青貝―　…178　／コラム16　親和的な素材―鼈甲―　…183

コラム17　輸出漆器と輸出陶磁器の比較　…192　／コラム18　産業としての推移　…196

【特別インタビュー】
金子皓彦コレクションの軌跡 …… **199**

エピローグ　かながわの木工芸の現在 …… **213**

コラム19　戦後神奈川の伝統工芸―木工芸を中心に　…220　／コラム20　横浜芝山漆器研究会　…224

〈資料篇〉

「横浜芝山漆器」の実像―歴史・技法・背景―　鈴木　愛乃　…… *225*

試論：明治美術と近代産業―漆工を焦点として　角田　拓朗　…… *235*

近代横浜漆器商等一覧 …… *233*

関連年表 …… *243*

参考文献 …… *246*

出品目録 …… *253*

List of Plates …… *256*

Another golden age in the history of Japanese lacquerware　Takuro Tsunoda & Yoshino Suzuki　…… ii

…… vi

【展覧会データ】

名称　**近代輸出漆器のダイナミズム**
―金子皓彦コレクションの世界―

会場　神奈川県立歴史博物館
　1階特別展示室・コレクション展示室

会期　令和6年4月27日（土）～6月30日（日）

主催　神奈川県立歴史博物館

協力　ＮＰＯ法人山手アーカイブス

後援　横浜芝山漆器研究会、静岡市産業振興課、箱根町教育委員会、明治美術学会、一般社団法人日本漆工協会、神奈川新聞社、朝日新聞横浜総局、毎日新聞社横浜支局、読売新聞横浜支局、産経新聞社横浜総局、東京新聞横浜支局、日本経済新聞社横浜支局、共同通信社横浜支局、時事通信社横浜総局、tvk（テレビ神奈川）、ラジオ日本、FM ヨコハマ、J:COM

助成　芸術文化振興基金

芸術文化振興基金助成事業

【凡例】

・本書は、特別展「近代輸出漆器のダイナミズム――金子皓彦コレクションの世界」の図録である。

・本書は、同展の企画担当者である鈴木愛乃（神奈川県立歴史博物館学芸員）、及び角田拓朗（同主任学芸員）が編集し、また小川咲良（神奈川県立歴史博物館非常勤学芸員）が編集を補助した。

・本書に掲載される作品・資料は、必ずしも展覧会の展示順とは限らない。また展示替等のため、掲載されているすべての作品等が会場に並ぶわけではない。また参考出品されている一部の作品等は本書に掲載されていない。

・本書図版篇に掲載される作品・資料情報は、以下の通りである。
　出品番号、名称、作者等、時代、素材・技法、寸法、所蔵

・時代はその制作年や年代が明らかな場合のみ明記した。

・所蔵明記のない作品はすべて金子皓彦コレクションである。

・本書図版篇の執筆分担は、以下の通りである。
　小川　コラム17、3―41・48、I―8・9
　角田　コラム08・18、関連地図、2―14・46～48、3―26～28・63～69
　鈴木　すべての章扉、小川・角田執筆以外のすべてのコラムと作品解説

・本書に掲載した図版は、荒井孝則（神奈川県立歴史博物館フォトグラファー）が写真撮影した。そのほか、所蔵機関・個人から提供された画像を利用した場合もある。

・本書の表紙、本扉のデザインは、野島愛子（神奈川県立歴史博物館デザイナー）が担当した。それ以外のデザイン及び本書DTPは、角田が担当した。

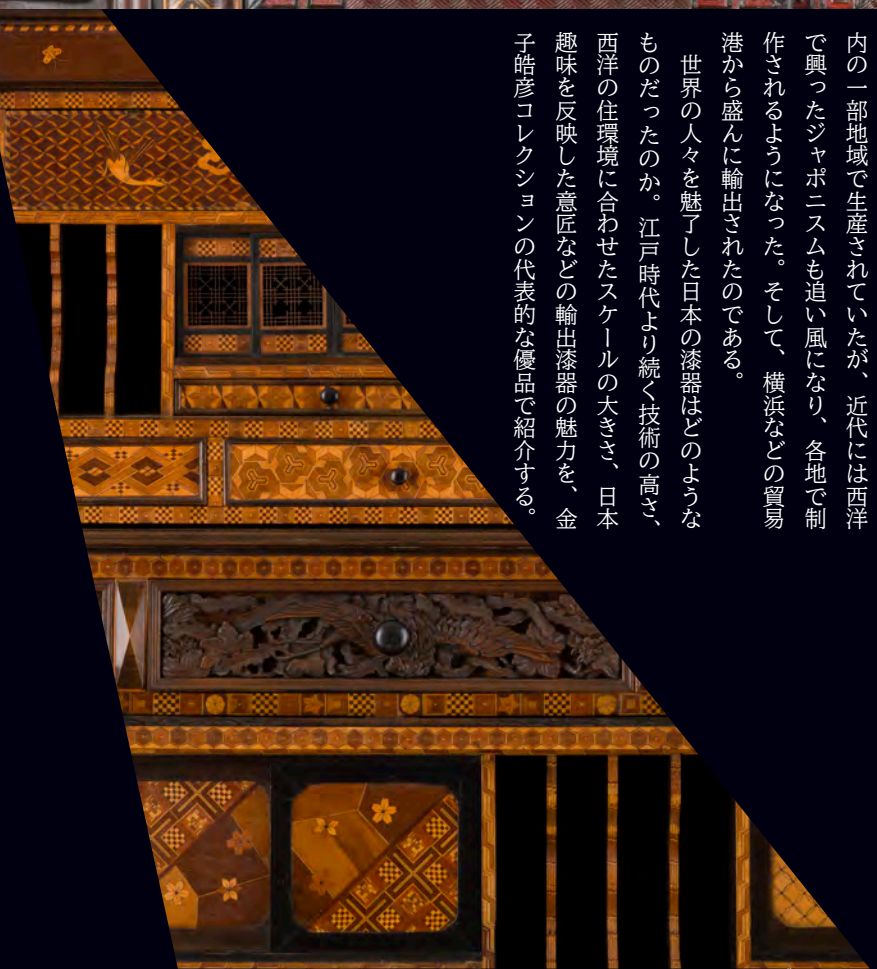
・本書は以下の研究成果の一部である。
　ポーラ美術振興財団令和5年度助成「近代横浜の輸出漆器における芝山細工について―技法の調査を中心に―」（研究代表：鈴木愛乃　研究協力：角田拓朗）
　科学研究費基盤研究（B）「近代日本美術史における美術商に関する基礎的研究」（研究代表：角田拓朗　研究分担：鈴木愛乃　JSPS 科研費 JP23H00587）
　科学研究費基盤研究（B）「明治・大正・昭和戦前期図画手工教科書データベースの拡充とその活用に向けた調査研究」（研究代表：赤木里香子　研究分担：角田拓朗　JSPS 科研費 JP22H01007）

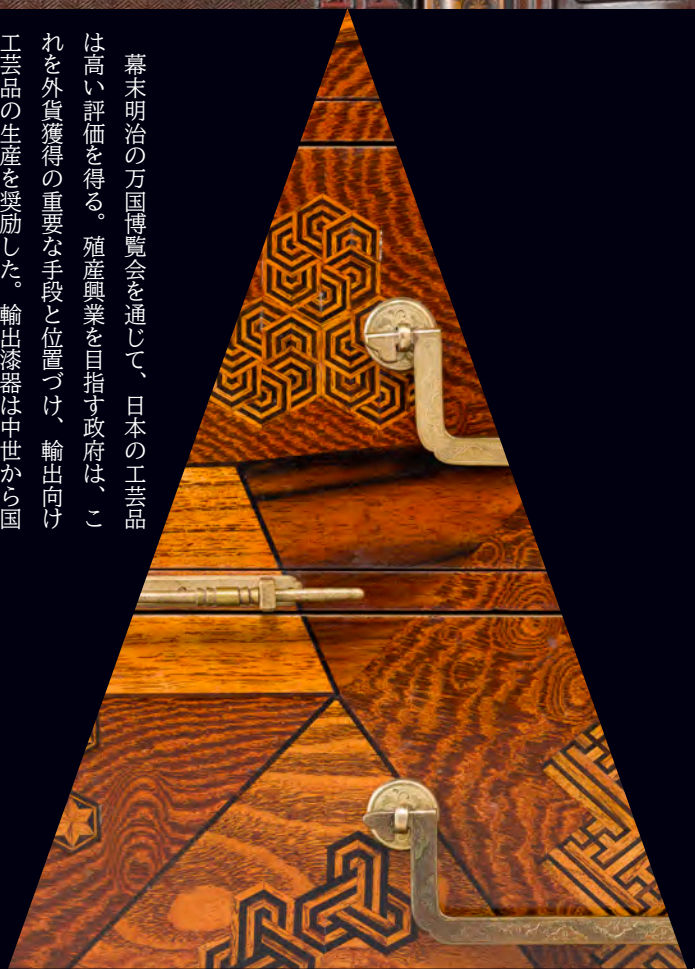
公益財団法人
ポーラ美術振興財団
POLA ART FOUNDATION

プロローグ
競演する技法

幕末明治の万国博覧会を通じて、日本の工芸品は高い評価を得る。殖産興業を目指す政府は、これを外貨獲得の重要な手段と位置づけ、輸出向け工芸品の生産を奨励した。輸出漆器は中世から国内の一部地域で生産されていたが、近代には西洋で興ったジャポニスムも追い風になり、各地で制作されるようになった。そして、横浜などの貿易港から盛んに輸出されたのである。

世界の人々を魅了した日本の漆器はどのようなものだったのか。江戸時代より続く技術の高さ、西洋の住環境に合わせたスケールの大きさ、日本趣味を反映した意匠などの輸出漆器の魅力を、金子皓彦コレクションの代表的な優品で紹介する。





P—1

寄木細工飾棚

木、漆、寄木細工

明治5年頃

仕切板の側面や棚の背面に至るまで、全面に精緻な寄木細工がほどこされ、透漆を塗って仕上げられた飾棚。木目の美しさを活かした乱寄木や市松文の寄木のなかに、繊細に組んだ古小寄木（ここよせぎ）や、「福」「寿」の文字をかたどる寄木、別材によって作られた雪輪や松菱など様々な形の窓が象嵌される。各部の輪郭を黒色で効果的に縁取ることで、細かい文様が際立ち、全体の印象を引き締めている。

中段左の折戸の中には、中央を軸に360度回転する箱型のからくり棚がある。棚や抽斗（ひきだし）を備えたその四面全てにも細部まで寄木がほどこされる。棚板の筆返しには黒漆塗りに蒔絵で桐唐草文様が描かれる。引違い戸の蝶や扇をかたどった把手、飾り金具など、各部の金具も意匠が整い、上質である。見事な装飾に目が惹かれるが、躯体そのものも堅牢に作られている。寄木細工の技術の粋だけでなく、様々な工芸技術が結集した優品。明治6年に開催されたウィーン万国博覧会の日本館内部の写真に、同型の作品が展示されている。これは静岡の山本安兵衛によって制作されたと考えられ、本品も当該品もしくはそれに追随して作成されたものだろう。

P―2

芝山細工飾棚

木、漆、芝山細工、蒔絵、木彫

身長を超す大きさの飾棚。椅子を用いる西洋の生活様式に合わせたものと思われ、脚部がついている。上部中央の龍、左右の鯱をはじめ、各部にほどこされた彫刻が印象的である。引違い戸や奥板には、牛骨と貝を用いた芝山細工で花鳥図をつくる。その背景には金を塗り込めながら、ところどころ金の濃淡を使い、下地の朱漆を見せるようにして土坡のなかの水の流れをあらわす。抽斗や引違い扉の枠には雷文や菱繋文を彫り込み、朱と黒によって彩色している。奥板の菱万字文など、随所にほどこされた幾何学文の彫刻は中国の彫漆器を思わせる。さらに扉の周囲や棚板の縁には、波丸などの蒔絵をほどこす。こうした飾棚は様々なバリエーションのものが残っているが、彫刻をほどこした上部の飾板や鯱、脚部をそなえた本作は、その典型的な形式を有しているといえる。

明治期の輸出商であるクーン&コモル商会の店内を撮影した写真に同様の飾棚が写っていることから、本作やその類例は明治30年頃には制作・販売が盛んに行われていたことがわかる。

P—4

寄木細工ライティングビューロー

木、漆、寄木細工、木彫

高さ181㎝、幅240㎝と、本展覧会に出品された作品の中で最も大きな作品。イギリスからの里帰り品であり、相当な広さのある室内で利用されていたことがうかがえる。引き出しや棚が隅々まで設けられているため重量もあるが、輸送のため上部、中部、脚部2つ、手前と奥2つの幕板と、5つのパーツに分解できる。中段には大きな扉がある。その扉を桟にそって弧を描くように押し上げると、本体のなかに収納できる。扉を開けると、違い棚や抽斗があらわれ、その下に収納されているライティングデスクを手前に引き出すことができる。現在も引っ掛かりがなく収めることができ、当時の技術の高さが感じられる。引き出しや書棚も含めて全面は寄木で覆われ、随所に木象嵌や彫刻がほどこされている。左右からは扇を象ったサイドテーブルを引き出すことができ、菊唐草文の横浜彫と思われる透し彫りを開くと支えとなり、遊び心ある仕掛けとなっている。

第一章　貝の光　骨の艶

―芝山細工

芝山細工とは、象牙や獣骨、貝、珊瑚、鼈甲（べっこう）など、様々な材料を文様の形に加工し、漆器や木工品、金工品などの表面に立体的に象嵌する技法のことを指す。江戸時代後期に江戸で発展し、海外からの人気をあつめ、のちに横浜で制作された輸出漆器の装飾として盛んに用いられるようになった。芝山細工の特徴は、その立体感にある。象嵌の技法としては、浅浮き彫りのようにあらわすもの、土台をつけて器面から飛び出すようにあらわすもの、花びらなどを一枚一枚かたどったパーツを器面に取り付け、立体的な花をあらわすものがある。様々な素材の持つ色合いや、湾曲したかたちを活かして華やかに表現された花や鳥は、西洋人の目を強く惹くものであったろう。

華やかな芝山細工や、立体的な横浜彫など、様々な装飾技法が併存する漆器を紹介し、輸出工芸制作の展開とその背景を横浜を中心に探る。

1—11

芝山細工双鷹図額

木、漆、芝山細工、透き絵

互いの首に噛みつく二羽の鷹をあらわした飾額。パネルに枠をつけた形式のほかの飾額と異なり、大きく側面が立ち上がった深い皿のような器胎に、透き絵と金泥を塗り分けている。鷹は寄貝によって浮き上がるように表現され、周囲を舞う羽は平模様で象嵌されている。複雑に絡み合う鷹の身体は細部の構造がわかりにくいが、外側の羽には茶褐色、内側の羽には白の蝶貝が用いられ、ダイナミックな姿態となるようその表現が工夫されている。互いを掴む脚も、牛骨を細部まで彫り込んでつくられている。あまり類例のない意匠である。

1—16

芝山細工飾棚

木、漆、芝山細工、蒔絵、木彫

高さが２ｍを超える、大型の飾棚。

各部分に繊細な彫刻がほどこされ、奥板と扉の鏡板には蒔絵と芝山細工により、蓮に鷺、桜に鳩、木蓮に雉など様々な花鳥図があらわされている。

扉枠には蒔絵による唐草文が描かれ、鏡板の花鳥図は蒔絵に加えて、ところどころ花や鳥の形にレリーフ状に象った貝や牛骨が象嵌される。鳥の身体や花をあらわす貝や牛骨には、羽の一枚、花脈の一本まで柔らかみのある表現がなされ、芝山師の技術の高さが伝わる。鏡板はほとんど左右つながるよう構図も整っており、優れた下図の存在を感じさせる。

幕板や背板には唐草文が透し彫りされ、上段左の棚の左右には竹に雀、下段左の引違い戸には龍文が彫られ、柱にも彫刻がほどこされている。こうした彫刻は横浜彫と考えられる。高さに比して奥行きは浅いが、中段左の棚は曲線を描いた引違い戸となっていたり、彫刻を重なり合うように見せるなど、決して実用性を重視しているとはいえず、棚そのものが鑑賞用であったのだろう。輸送の利便性のためか脚部が分かれる。

1—36 芝山細工牡丹図衝立

木、漆、芝山細工、木彫

芝山細工で牡丹がほどこされた衝立。このような衝立や屏風は、暖炉の前に置き、目隠しとして用いられた。竹を編んだような周囲の文様は、木彫による。中央に楕円の窓をとり、牡丹の花や葉が、牛骨をもちいて立体的にあらわされている。これは、芝山細工の「浮き上げ」という技法である。牛骨や象牙の湾曲を活かし、花弁の一枚一枚を彫り、花芯に寄せるように形を整えながらネジなどで留めることで、表面から浮き上がって見えるためこのように呼ばれる。この技法は、芝山細工のなかでも最も難しいとされている。本作では牡丹の花びらの重なりが外側にむかって徐々に開くようにあらわされており、花びらを作る技術と象嵌の技術双方の高さが感じられる。

第二章　木の彩り——寄木細工・木象嵌

寄木細工と木象嵌は、様々な色や木目をもつ木材によって文様をつくる技法のことである。木材を組み合わせて幾何学的な文様を作る寄木細工は、主に静岡や箱根を中心に制作されていた。江戸時代後期より外国人にも土産品として人気を博していたが、明治を迎えると輸出向けの制作が盛んになり、大型の家具など、様々な器種が新たに生まれた。木象嵌は、文様の形に切った材料を別の材料にはめ込む技法で、木材の色を活かした絵画的な文様を作ることができる。富士図や花鳥図をあらわす木象嵌で装飾された小箱などは、土産物として好評を博した。

寄木細工には、漆塗で仕上げたものと、蝋引きなどで仕上げたものがあるが、どちらも漆器商によって扱われていた例がある。ここでは、厳密な意味では漆器でないものも含め、伝統の意匠を踏まえながら西洋の日本趣味に応えた優美な装飾をもつ家具・調度や、土産物の数々を紹介する。

2—4 寄木細工飾棚

木、寄木細工、木彫

170cmと高さがあり、装飾性の高い飾棚。西洋の邸宅のために作られたものであろう。上段には繊細に作られた格子戸がはめられており、その下の小さな棚にも異なる模様の格子戸がある。このひし形に作られた棚は角の柱を支点に左右に90度開き、本体から飛び出すようになる。

ひときわ目を引く中央のミニチュアのような二棟の家屋は引き戸を実際に開けることができ、細部まで精緻に作られている。こうした家屋は葛家（くずや）といい、箱根でもよく作られていた。家屋の乗る棚の間に太鼓橋がかかるが、棚の高さが異なることにより跳ね上がるような形になり、軽快な印象を与えている。

家屋の屋根や太鼓橋には樹皮が貼られているが、箱根ではこのように樹皮を用いた工芸品も制作されていた。全体的にほどこされた寄木は比較的大柄なものが多く、目を楽しませる仕掛けが随所に見られる本品によく調和する。

2—24 寄木細工家形箪笥

木、寄木細工

時計台の形を模した変わり箪笥。煉瓦積みの外壁や窓枠、その上のアーチは、全て寄木によって作られている。下部は石段を思わせる亀甲文の寄木がほどこされている。中央は観音開きになっており、開くと抽斗や引違い戸があらわれる。時計を外すとそこにも寄木文がのぞき、遊び心が感じられる。下部も左右に引くと抽斗が設けられている。箱根湯本の田中庄吉商店を撮影した明治30年の写真2—14に、同型の箪笥が写っている（106頁参照）。さまざまな仕掛けを隠した木工芸は、箱根の得意とするところであった。ドイツで購入されたもの。

2—42 木象嵌富士図箱
木、木象嵌

2—43 木象嵌富士図ひみつ箱
木、木象嵌

2—44 木象嵌水車小屋図箱
木、木象嵌

木象嵌による風景図のなかで、富士をはじめ水辺の景は、外国人に人気が高い。こうした作品では、大きくあらわされている空や水の表現で、木目が活かされる場合が多い。ここに紹介する作例もその作例であり、いずれも箱蓋に窓をとって木象嵌がほどこされている。

2—42・43は両方とも縁を黒柿とし、側面は縞状の寄木である。2—43には蓋が見えないが、側面のある部分をずらすと蓋がスライドするひみつ箱になっている。箱根では様々なひみつ箱がつくられ、現在でも土産物として人気があるが、その最も簡素な形である。

2—44の水車小屋の景は、木々の葉や屋根、水の流れの陰影に至るまで様々な木材で繊細に表現されている。蓋の裏側も、薄や菊、蝶が木象嵌で表現され、高い技術が感じられる。

2－44

第三章

漆のにぎわい ―輸出漆器

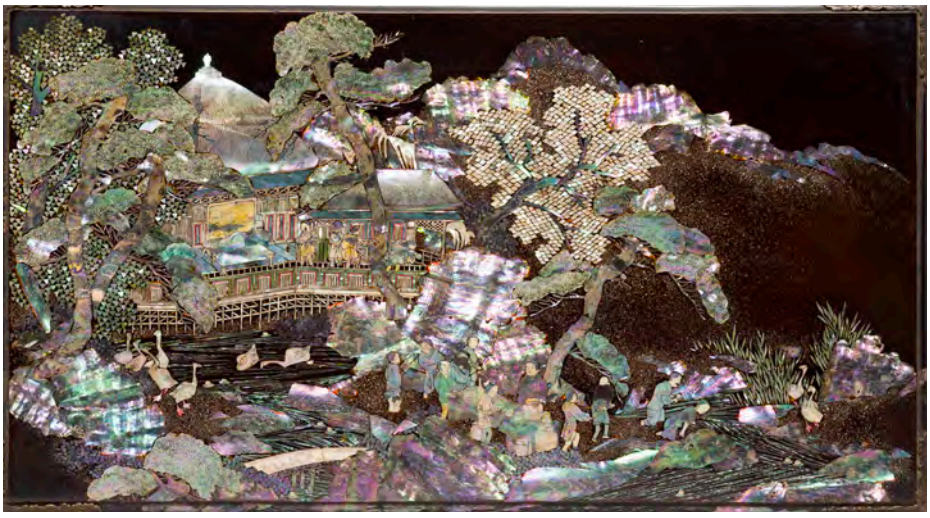
本章では、各地で作られた様々な輸出漆器について紹介する。日本各地の漆器の産地では、明治維新を機に輸出漆器の生産が盛んになる。制作された漆器は横浜などの開港場に運ばれ、世界へ輸出されていった。近代は、人、モノ、技術が活発に移動した時代である。よりよい漆器の制作のため、各地で培われてきた技術が、ひとつの工芸品の中に混ざり合い、競い合い、併存、融合するようになった。本章で紹介する漆器は正確な産地を特定できないものがほとんどであるが、こうした混合こそ近代の輸出漆器の面白さであるといえる。外国人からの需要が漆器にもたらした新しい造形表現と、多種多様な技術が集結して制作された漆器の世界の広がりを紹介する。

3—3

蒔絵獅子牡丹図箪笥

木、漆、寄木細工、蒔絵

高さ45㎝の箪笥。側面には把手がつけられている。透漆を塗った上に、牡丹に獅子と蝶が高浮彫で薄く盛り上げて表現されている。前面には、八杯の抽斗（ひきだし）と観音開き戸がつけられている。図柄は抽斗の前板と仕切りを横断して前面いっぱいに描かれており、観音開きの扉には、市松文の寄木の上に蒔絵で菱繋文を描いた枠がつけられている。鏡板には蝶が描かれ、扉の掛金具は三匹の蝶があらわされている。開くとあらわれる抽斗の撮（つま）みも蝶がモチーフであり、細い足や触覚まで精巧に作られ、羽の模様まで刻まれている。扉裏には富士と龍が蒔絵で描かれる。天面、側面、背面にも、意匠が充填され、市松文の寄木に蒔絵で菱繋文を描いた枠のなかに牡丹獅子図が高蒔絵で描かれている。蝶の金具を始め、隅金具や蛭手の引手金具も手が込んでいる、見どころの多い作品。



3—37

青貝細工蘭亭曲水図手元箪笥

木、漆、青貝細工

前面、両側面、天面、背面の隅々まで、鮑貝を用いた青貝細工で埋め尽くされた手元箪笥。側面に把手がつく。

意匠は中国東晋代の書家・王羲之が、蘭亭という別荘に文士を招いて行なった曲水の宴をあらわす、「蘭亭曲水図」である。曲がりくねる流水に盃を流し、自らの前を通り過ぎる前に詩を作り、詩ができなければ盃を飲み干すという風雅な遊びに興じる様子が描かれている。天板にあらわされた堂宇に座す王羲之のもとから、水が箪笥の全面に広がって流れていくように、絵柄がつながっている。水の流れや木々は細く切った貝片や三角形に切ったものを並べてあらわされ、人物などには各部分に象り伏彩色がほどこされた貝片が用いられている。宴に参加する人々は80人以上描かれているが、それぞれ思い思いの体勢でいきいきとした表情をみせる。前面には引違い戸、抽斗、片開き戸がついている。片開き戸を開くと、扉の裏側には、貝片の裏を赤く塗る伏彩色の技法によって、鮮やかな桃色の桜が表現されている。三杯の抽斗の前板も含め、扉を開いても途切れなく意匠が続いている。輸出漆器には日本の風俗だけでなく、中国の故事なども題材として用いられた。

3—46

鼈甲細工蒔絵花鳥図小箪笥

木、漆、鼈甲細工、蒔絵

3—45と同じく、鼈甲が大きく用いられた小箪笥。正面には三杯の抽斗と観音開き戸が設けられ、前板と鏡板に鼈甲を貼って蒔絵で花鳥図があらわされる。天面と側面には黒漆塗に扇面や団扇形の鼈甲が貼られ、花鳥図が蒔絵で描かれる。いずれも鼈甲を透かして、木地の平行に整った柾目が見える。観音開き戸を開けると小さな抽斗と棚が設けられ、梨地に蝶の蒔絵が描かれている。箪笥の縁には金具が全面的に用いられ、背面には金蒔絵で蝶が描かれる。正面上部の抽斗や、観音開き戸奥の抽斗のつまみは、それぞれ松かさと梅に竹を象った飾り金具が用いられるなど、各部の完成度が高い優品である。